

初めてのいってきます！

サポーターズマニュアル

第2版



子どもの
危険回避
プログラム

子どもの
安全を支える
世田谷の力

世田谷区

このマークは音声コード「Uni-Voice」です。専用アプリなどで読み取ると内容を音声で聞くことができます。

子どもの輝く明日のために

世田谷区では、平成16(2004)年、小学校入学を控えた保育園・幼稚園に通う年長児などが、入学後安全安心な生活を過ごすことができるよう、小学校に入るまでに危険に対応できる能力を身につけるためのガイドブックを作成しました(『初めてのいってきます!~応援ブック~』)。それに併せ、園の先生や保護者、地域の方々が子どもの危機管理能力の育成をサポートしていけるよう、大人向けの指導マニュアルも作成しました。それが本サポーターズマニュアルです。

その後、文部科学省は、犯罪を含む様々な危機を乗り越える力を積極的に育てるため、安全教育を正規授業化(義務化)しました。平成22(2010)年文部科学省は、幼児期の教育(保育園、幼稚園)と児童期の教育(小学校における教育)を円滑につないだ教育を進めることを定め(保幼小接続)、また平成30(2018)年からは、安全教育が正規授業化されました。幼稚園や保育園でも小学校や中学校とつながりを持たせた安全教育を行わなくてはならなくなったのです。安全教育が十分な効果を上げるために、まず園で基礎を十分に培うことが求められます。

上記の変化を受け、サポーターズマニュアルを大幅に改訂しました。本マニュアルと併せ『初めてのいってきます! ~応援ブック~』をお読みください。本マニュアル中の➡で示した数字は『初めてのいってきます! ~応援ブック~』のページを示しています。



『初めてのいってきます! ~応援ブック~』

改訂版サポーターズマニュアルのポイント

- 本マニュアルでは、卒園を目の前にした年長児までに身につけられるとよい「犯罪からの危機回避・克服力づくり」に焦点を絞りました(➡P12)。
- 園児の発達段階に沿った安全学習の目標と具体的内容をプログラムとしてP11に掲載しておりますのでご参考ください。また特に重要な項目の幾つかを取り上げ、その大切さと具体的方法を示しました。
- プログラムは、あくまでも「小学校に向けての接続期にこういうことをやっておくことが大切です」ということを示したものです。プログラム中の全てを行う必要はありません。今まである園のプログラムに必要だと思う項目があれば、園の状況や子どもたちの様子に応じ選択していただき、やりやすいよう工夫して行ってください。

目　次

1　園の安全教育、これだけは心得ておきましょう …… 3
2　その前どうする …… 4
3　その時どうする …… 5
4　その後どうする …… 10
5　子どもの安全能力を測りましょう …… 10
6　接続期におけるマイ園プログラムを充実させていきましょう …… 11
【ご参考】接続期における犯罪からの体験型安全教育基本プログラム …… 11

1 園の安全教育、これだけは心得ておきましょう

子どものための接続期の安全教育を工夫しましょう

子どもたちを取り巻く安全安心な環境は生活に合わせ変化し、指導方法や取り組みも変化しています。本書の基本的な接続期安全教育プログラムを参考にしていただき、よりよい「マイ(my)園子どもの安全プログラム」づくりを工夫してみましょう。

安全教育には「3つの時」があります

犯罪や地震などに共通して危機に備えた「3つの時」があります。



何かことが起こる前に
備えておかねばならない
基礎的心構えや態度・行動

何かことが起こった
その時どうするかの
知識や態度・行動

何かことが起こった
その後どうするかの
知識や態度・行動

この3つの「時」に沿って考えることは、子どもの危機問題の整理をとても簡単にしてくれます。みなさんの「マイ園子どもの安全プログラム」づくりをこの「3つの時」に沿って行うことをおすすめします。

備えておこう子どもの安全「2つの基本的心得」

心得その1

安全安心に「これで絶対だいじょうぶ」という言葉はありません。

危ない人(犯罪者)は絶えず勉強し手口を変え、一瞬の隙を見つけて行動します。
ですから「マイ園子どもの安全プログラム」を作り子どもを指導しているから絶対大丈夫、ということはありません。
常に見直して、改善・改良していきましょう。

心得その2

「そう言えば」「まさか」「あの時どうして」という言葉をなくしましょう。

危ないことが起こったその後で、深い後悔の念を込めてこの言葉が使われます。危ないことには、事前に気がついた、もしくは気がつかなかった前兆があります。どういった前兆があったのか確認し、園の安全対策を見直していくことが大切です。

2 その前どうする

3つの時の内「その前どうする」では、普段から心がけておくとよい安全教育の基本的な心構えや態度などについて記載します（P11プログラム参照）。

1. 命や体の大切さ、かけがえのなさを知りましょう

小学生へ向けた接続期に最も大切な安全教育の目標は、「**あなたの命や体は大切でかけがえのないものだ**」ということを子どもが知り、感じることです。

子どもは純粋に「良いものは良い」、「いけないことはいけない」、「危ないことは危ない」など生きていく上で根本的に大切なことを、素直に受け入れることができます。「命や体」、「お友だち」の大切さを知ることは大変重要です。

自分の命や体が「大事だ」と思うことなしに、自分の力で自分の安全を守ろうという「自助の芽」は育ちません。周囲の信頼できる大人やお友だちと「命や体」の大切さを共有し、「共に助け合う」という共助感覚の基礎を培い始めることができます。

2.「その前どうする」を体験しておきましょう

「その前どうする」では、命や体の大切さを知るほかに、危機を乗り越えるため必要な幾つかの基礎的事柄について体験していくことも大切です。

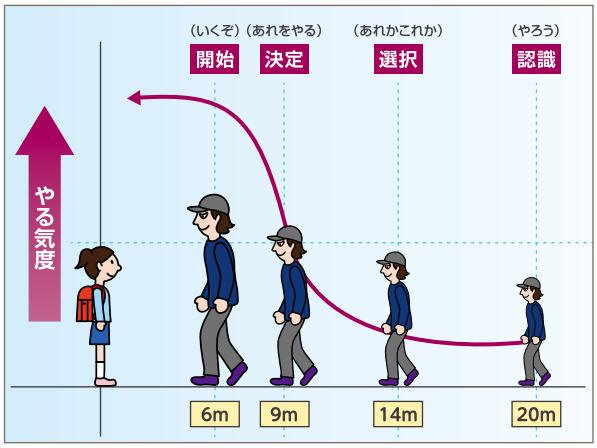
❶危機回避の第１歩は「歩き方練習」から

子どもの犯罪被害のほとんどは通学途中で起こります。実験や調査で犯罪者は、被害者のおよそ20メートル手前から狙い、だんだん「やる気」を高め、最後は5～6メートルで実行に移すことが分かっています（図1）。子どもが変な人・怪しい人・危ない人を早く見つけ危機を回避するためには、20メートル手前からどんな人がいるかを見分けることがとても大切なのです。しかし、子どもの「見える範囲」は大人に比べとても狭いことが分かっています（図2）。そのため、子どもは周りを見るためにキョロキョロしてしまうのです。

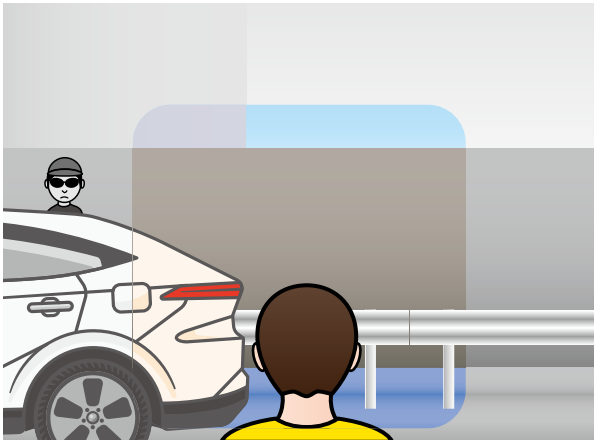
興味や関心があるものに熱中するのは子どもの特権なので、あまり神経質になってはいけませんが、「ふらふらしないで、しっかり前を見て歩こうね」と声掛けすることはとても大切です。

子ども、特にもうすぐ小学校に通うことになる年長児を対象に「しっかり前を見て歩く」ことがなぜ大切なのかを説明しながら、実際に園庭や園外の道路で「歩き方体験指導」（交通事故対策を含む）をすることが、園で子どもに回避能力をつける「初めの一歩」です。

【図１】犯罪者のやる気の変化



【図２】明るい部分が子どもが見える視野。
暗い部分まで見えるのが大人



❷日頃のあいさつを大切にしましょう

子どもを守る一番の「力」は、周囲の見守りの「目や声」です。犯罪者は他者の視線や声を大変嫌います。

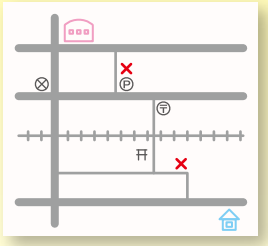
園外保育の時、近隣の方や良く見知った方で、子どもに理解のある方に日頃からあいさつをしましょう。その時、子どもにも「あいさつの仕方(あいさつしてよい人・せねばならない人・あいさつの内容・あいさつのタイミングなど)」を教えましょう。こうした相互交流があれば、何かあった「その時」に、「110番の家」でなくとも、その人やその家に「飛び込む」などの避難行動が取りやすくなります。また、保護者の方と通学路の「**おさんぽ安全マップ**」を作る時のチェックポイントにもなります。

ただ、むやみやたらなあいさつはマイナス効果(犯行意図を持つ者に接近の口実を与えるなど)を生む場合もあることに注意しておく必要があります。

あいさつは教えられなければできません。子どもの時にこそあいさつの仕方をしっかり学びましょう。

「おさんぽ安全マップ」とは

自宅から園・学校までの道をお散歩しながら、危ない場所、安全な場所、見守ってくれる人がいる場所、怪しい人がいた場所など簡単に地図に記すのが「おさんぽ安全マップ」です。白紙に自宅から園・学校までの道と、目印となる場所、ひまわり、はちみつじまんを参考に描き入れます。定期的にアップデートしていくとよいでしょう。



ひ ひとりきりになるところ
ま まわりからみえない(みえにくい)ところ
わ わかれ道、わき道やうら道のおおいところ
り りようされていない家やあきち、公園、ちゅうしゃじょうなどだれもいないところ



は しつこくなにかとはなしかけるひと
ち ぐんぐんちかづいてくるひと
み じっとみつめてくるひと
つ いつまでもどこまでもついてくるひと
じま じっとまっているひと
ん そういうひとには ん? と注意



❸「一人になっては危ない」ということを知りましょう

子どもの自立に「一人歩き」はとても大切です。しかし、自分の身を自分で守るための最低限の知恵と力がつくまでは「一人歩き」には徹底して注意することが大切です。

犯罪者は一人でいる子ども、一人だけになりそうな子ども、一人だけにすることが簡単そうに見える子どもを狙います。

子ども、特に抵抗力・逃走力が低く、誘いかけにも弱い子どもには「一人になったら危ない」だけでなく「**誰もいない、周りから見えない・見えにくいところは危ない**」「**一人にならない**」ことを徹底して教えてあげてください。小学校2年生の下校途中の女の子がみんなと別れ「もう少しでお家」の路上で被害に遭った事例があります。

どうしても一人になってしまう場合は、「**ひまわり**」の場所に気をつけると同時に、夕方以降は連続した街灯のある道を歩くように教えましょう。「ポツン」と光るような街灯だけだと、灯りの下の子どもの顔がかえって照らされ、周囲の暗闇からねらわれるおそれがあります。

3 その時どうする

危機に出会う寸前、あるいは出会ってしまった「その時」のために身につけておかねばならない力や行動について記載します。

❶「その時どうする」の危機を乗り越えるための9つの「力」とは

危ない目に遭いそうになった時、自分で乗り越えていく力も、少しずつはぐくんでいくことが大切です。犯罪から身を守る方法を標語にしたのが「**ハサミとカミはおともだちと伝えよう**」です(表1)。

この9つの「力」のうち、接続期としての就学前の幼児期に「特につけておきたい力」を◎、「つけておくのが望ましい力」を〇で示しました。

この標語は、「どのような力」が危機回避・克服に必要な力なのかを先生や保護者などに向けて簡単にまとめたものです(表1)。子どもが記憶しなければならない標語ではありません。

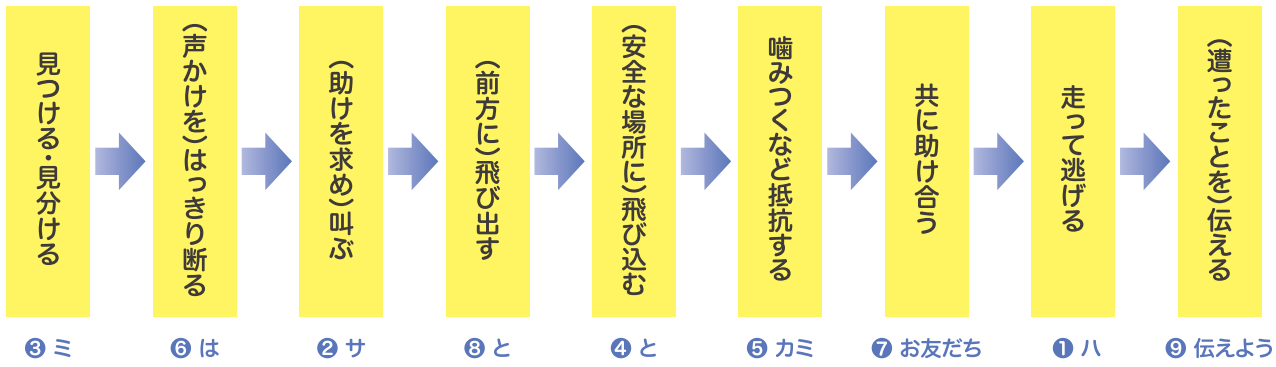
【表1】「その時」の危機を乗り越える9つの力

	❶ ハ	❷ サ	❸ ミ	❹ と	❺ カミ	❻ は	❼ お友だち	❽ と	❾ 伝えよう
つける力	走る力	叫ぶ力	見つける・見分ける力	飛び込む力	噛みつくなど抵抗する力	はっきり断る力	共に助け合う力	飛び出す力	伝える力
具体的には	20メートルを走り逃げ切る	身振りをつけるなどしながら大声を出す	変な人・怪しい人・危ない人・場所を見分ける、見分けようとする	安全な場所を見つけ、そこに飛び込み助けを求める	加害者に噛みつく・じたばたする・腕ブンブンする、防犯ブザーを鳴らす	「いやです・だめです・いきません」と言葉や態度できっぱり表す	友だちどうし見守り合い、助け合う	ステップを切って、危機遭遇地点から逃げる	周囲に見たこと、出遭ったことを伝える、伝えようとする
指導のポイント	20メートルの意味を知る。自分の走る力がわかる	叫ぶだけでなく身振りをつけることの大切さがわかる	誰にでも何処でも危ないことは起こることがわかる	普段のあいさつを通して逃げ込む場所がわかる	噛みつきは、噛みつく場所とタイミング、ふざけてやらない	知っている人でも一人だけになるところに連れて行く人は怪しい人だとわかる	距離を置いてジッと見ることの大切さがわかる	鬼ごっこ・ケンケン遊びで飛び出す、走り出すタイミングがわかる	親しい人への日常のあいさつ、すぐ知らせることの大切さがわかる
園でつける力	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎

❷「その時どうする」に備え、幼児期に安全のための「力」をつけましょう

「ハサミとカミはお友だちと伝えよう」の順にこだわらず、下記の図3に示すような変な人・怪しい人・危ない人を見分けることから始まり、危機を回避・克服し、その後先生や保護者などに伝え終わるまでの順で、それぞれの「力」に気づき関心を持つように指導してみましょう。

【図3】「その時」の子どもの行動変化



(1) ミ 変な人・怪しい人・危ない人を見つける・見分ける力 重要度◎

多くの不審者や犯罪者遭遇の事例調査から、P4の図1で述べたように変な人・怪しい人・危ない人は被害者のおよそ20メートル手前(電車1両分の長さ)から「ジッと見る」などして、様子をうかがっていることがわかりました。そして、気持ちをどんどんと高ぶらせながら一気に実行に移しています。

「人が潜みやすい場所」、「怪しい人の行動」の特徴をそれぞれ「**ひまわり**」、「**はちみつじまん**」の標語で表しました。(➡P12、13)。

園外保育などで、「**ひまわり**」で表される場所を実際に子どもたちに見せて、「危ない」ことを教えてください。また、「**はちみつじまん**」で表される人には「十分注意」することを繰り返し伝えましょう。年少児・年中児にはかなり難しいと思います(そのためまず一人にしない、一人にならないが大切)。しかし、年長児になると「怪しい人」、「不審者」という言葉を実際多くの子どもが発しており、「怪しい」の理解はされやすく、「気をつける人や場所」に関心を持ち、気づく準備が十分できているものと考えられます。

こうした知識を得ると、やみくもに怖がったり、全く無関心で無防備になるのではなく、しっかり周囲に気をつけながら歩き、見守りの方などにはあいさつをしながら通学路を歩けるようになります。

(2) は はっきり断る力 重要度◎

はっきり断る力は、幼児期の安全教育、特に小学校入学が迫った年長児には大変重要です。この力は幼児期でも十分体得できます。

変な人・怪しい人・危ない人は、必ずといってよいほど、事前に子どもの周りをうろつき徘徊します。そして、様子をうかがいながら近づいてきて、多くの場合、子どもの様子や周囲の状況を捉えながら、非常に巧みにさまざまな声かけをします。

①子どもを一人にさせようとする(子犬がいなくなったけど一緒にさがしてくれるかな、トイレはどこにあるか教えて、お菓子を買ってあげるから一緒に行こう、など)、
②その場で脅す(○○しないと大変な目に遭うぞ、など)、
③目線や微笑みで気を許させ自分の思うがままにしようと誘いこむ(じっと凝視するなどの視線は声にならない言葉であることを、子どもたちにしっかり教えてあげてください)

こうした声かけのうち、特に**①子どもを一人にさせようとし、人の目の届かない場所に連れ込もう(動かそう)とする声かけに、たとえ知っている人であっても、断固と対応する必要があります。**対応の方法で最もよいのは、次の3つの言葉でしっかり断ることです。

①いやです! ②だめです! ③いきません!

この3つの言葉で事件になりそうな声かけの7割以上が防げます(千葉県警と㈱ステップ総合研究所の共同調査)。ただこの言葉を発するためには、子どもたち一人一人が先生とのやり取りでしっかり練習(ロールプレイング)を積んでおきましょう。

「いやです・だめです・いきません」ロールプレイング

先生が不審者(声かけ役)となり、子ども一人一人に内容を変えながら誘い、子どもは**「いやです・だめです・いきません」**の言葉を「はっきり・きっぱり」発し、その場を「サッサ」と去るというロールプレイングをくり返してください。何があったか伝える練習もしましょう。



(3) サ 叫ぶ力 重要度◎

危機を伝えるのに子どもの叫び声(金きり声scream)は良く通ります。しかし金きり声が出せたらです。実際には多くの子どもが声も出せずに立ちすくむ、しゃがみ込んでしまうなどの行動を取ってしまいます。「大声」は経験がなければなかなか出せるものではありません。幼児期に思いきり大声を出す経験をさせてください。一斉に出しても、一人ずつでもよいです。

声の内容は「キャー」でも「助けて!」でも大声であればどのような内容でも構いません。大切なのは連続して出すこと、大声を出すだけでなく手を振り回しジタバタすることも重要です。大声だけだとふざけていると見られる場合が多くなります。

「大声」で叫ぶ代わりに同じ音を出す「防犯ブザー」を鳴らすことも大切です。いざという時のために、前もってブザーの鳴らし方を学んでおくことが必要です。

（4）カミ 噛みつくなど抵抗する力 重要度◎

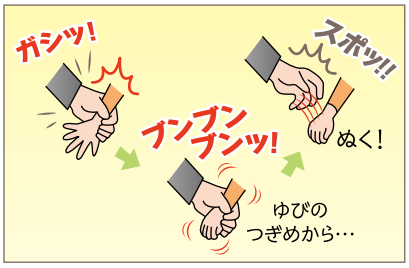
子どもでも身につけ、使える抵抗方法です。東京都内の園や小学校で、幼児期に学んだ以下の「テクニック」を使い危機を乗り越えたという事例が幾つもありました。

●「腕ブンブン」で抵抗する（図4）

不審者の多くは接近してきて子どもの腕を掴み、動きを封じ込めようとします。その時掴まれた腕をどう振りほどくか。図に見るように腕をブンと振り抜く「腕ブンブン」が有効です。掴まれた腕を一気に振りほどくスピードが大切です。

腕ブンブンに関わらず全ての抵抗に言えますが、「実行する時」は相手の隙（油断）を突いて「一気にやる」ことが大切です。

【図4】腕ブンブン



●「足ジタバタ」で抵抗する（図5）

掴まれてはいないが走り去ることもできないような状況の時、「隙を狙って逃げる」、「通りかかった誰かに助けてもらう」、あるいは「加害者が諦める」までの時間かせぎのための行動です。素早く地面に腰をつき、相手のすねを蹴とばして抵抗します。

【図5】足ジタバタ



●「噛みつき」で抵抗する（図6）

腕や手首、あるいは手そのものを掴まれた時の最後の抵抗法です。

子どもの噛みつきは、歯の先が尖り小型犬並みの威力があります。重要な点は、掴んだ手や手のひら、あるいは腕の露出部分に口を寄せ「皮膚を食い破るような気持ちで思いっきり」噛みつくことです。服やシャツの上から噛みついても効果はありません。この「思いっきり」は練習しなくてはできません。ただし、絶対にお友だちや先生などにふざけて噛みついてはいけません。

【図6】噛みつき

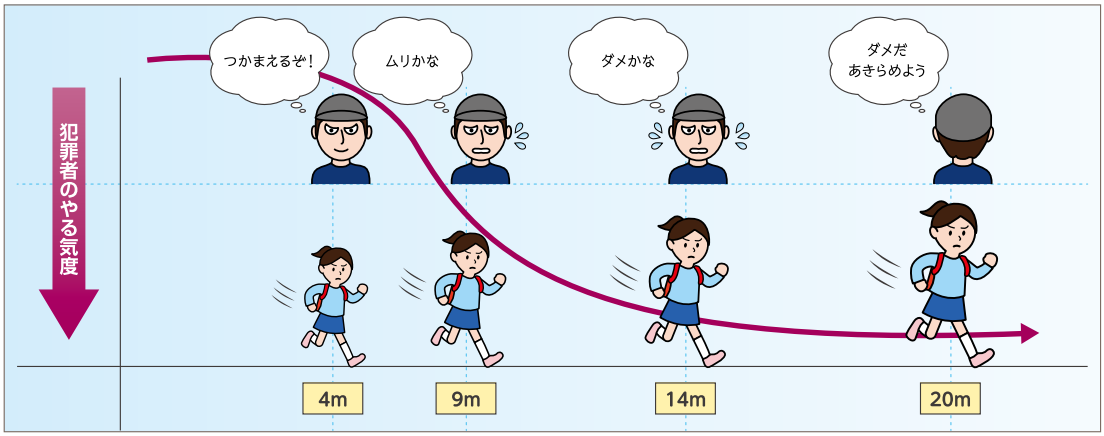


（5）ハ 走る力 重要度◎

「走り逃げ切る力」は、「はっきり断る力」と同じように重要な力です。

犯罪者の追いかけから逃げ切るには、およそ20メートルを走りきらねばならない（そこまで走らないと犯罪者は追いかけるのをあきらめない）ことが元犯罪者との実験でわかっています（図7）。そこで、子どもに「20メートルとは『電車1両』

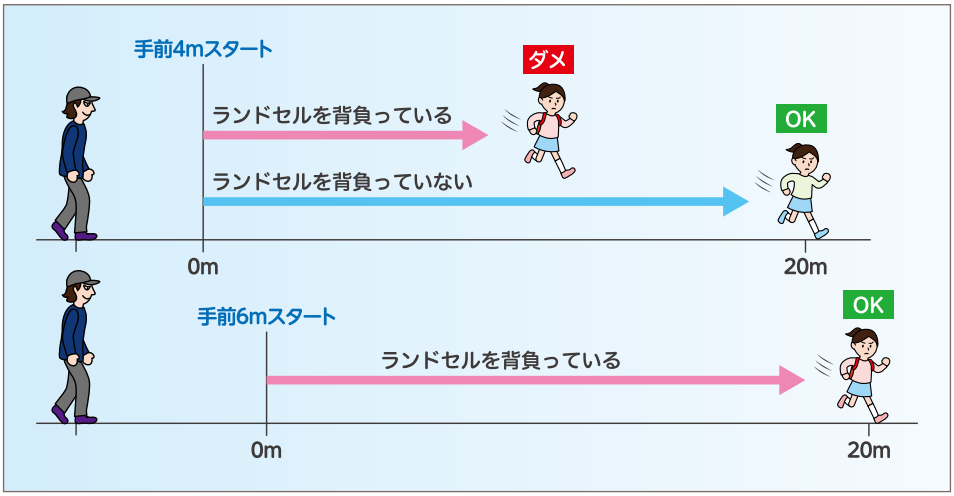
【図7】犯罪者が追いかけるのをあきらめる距離



あるいは『電柱と電柱の間の長さ』」と説明してください。子どもを20メートル分並ばせて見せるのもよいでしょう。そして、「怪しい人はこれくらい前からあなたたちを見ているし、追いかけられたらこの距離を逃げなければいけないんだよ」と教えてください。この感覚を身につけることは、小学校に入って「メートル」を正式に習うまで非常に重要です。

実験の結果、小学校4年までの子どもが20メートル逃げ切るには、何も背負わない状態で成人男性の手前4メートルから走り出さなければなりませんでした(図8)。ランドセルを背負うと、それがおよそ6メートル手前からになります。年長児にランドセルやリュックを背負って走る経験をさせましょう。また、前方に注意し、「怪しい」と思ったらすぐ反対方向に走り始める心の準備をするよう教え、実際に経験させてみるのもおすすめです。

【図8】犯罪者の手前どのくらいから逃げればよいか



(6) お友だち 共に助け合う力 重要度○

共に助け合うことは非常に重要ですが、幼児期では、体力、判断力、知識などにおいて積極的にお友だちを助けに行くことは難しいです。それでも2つのことはできます。

1つは被害に遭いそうな、あるいは遭っているお友だちを遠方から「ジッと見守って」あげることです。見守るだけで良いのです。元犯罪者はそういった「見守り」をする子どもは非常に「邪魔だし嫌だ」と話しています。

2つはお友だちがそうした状況にあることを周囲の大人(通りがかりの人を含む)に「伝える」ことです。「伝える」ことができた結果、非常に多くの子どもが「駆けつけた大人」に助けられ、被害に遭わずに済みました。

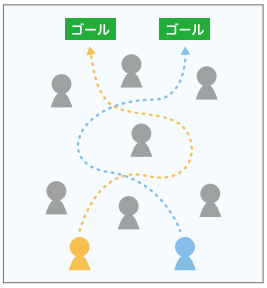
子ども、特に年長児に「見守る」や「伝える」ことで「困っているお友だちや人を助けられる」ことを教えてください。将来、本格的な共助の力の芽を培うことにつながります。

(7) と 飛び出す力 重要度○

令和元(2019)年に起こった川崎市登戸児童殺傷事件でも、不意に襲われた児童の多くは当初何が起こったか判らず、あるいはすくみ上がってしまい動けませんでした。そうした時大切な動作は、ラグビーの選手がステップを切りながら前方あるいは左右にポンと一気に飛び出す力です。

先生や子ども(ディフェンダー=追う側)が前方に立ち左右に動き、主役の子ども(トライヤー=逃げる側)は「1・2・3の掛け声」と同時に身をかわしながらそのディフェンダーの間をすり抜け(すり抜ける際の接触に注意)、ゴールを目指す速さを競う「すり抜け遊び」をしてみましょう(図9)。最初はなかなかできませんが、幼い子どもほど早く上達し、身軽に飛び出す力を身につけることができます。

【図9】すり抜け遊び



(8) と 飛び込む力 重要度◎

安全な場所(避難場所=アジール)に「逃げ込んで助けを求める力」であり、これも重要な力です。

こうした安全な場所として「110番の家」が在りますが、実際にはそう身近にあるものではありません。ですから**近くにある家や商店などに、とにかく「飛び込む」こと、大きな声で「ただいま」、「助けて!」などと叫びながら飛び込むこと**が重要です。

大声を出しながら、思い切りよく飛び込むには「勇気」が必要です。勇気は、普段の練習の積み重ねにより培われます。幼児期に「飛び込み」練習した経験のある小学校2年生が、不審者に遭遇した時、通学路に面した家の庭に飛び込み、事なきを得ました。後日「園で『飛び込みなさい』と教えられた」と語っています。



4 その後どうする

(9) 伝えよう 伝える力 重要度◎

危機を克服した後に、先生や保護者、あるいは地域の人やお巡りさんに伝えることがとても大切です。伝えることにより、危機の再発に備えることが出来るからです。

子どもが被害に遭う事件は、場所を少し変え日時を置いたとしても「繰り返される」ことが多いのです(*右記「前兆6・3・2の原則」参照)。子どもが出遭った危機は、引き続き起こるかもしれない危機の前兆かもしれません。この前兆をしっかり受け止め対応しましょう。そのためには、まず危機に出遭った子どもが、先生などにしっかり伝えられなくてはなりません。

伝える内容は、①いつ、②どこで、③どんなことが、④どんな人によって起こされたかです。普段から子どもたちに、どんな些細なことでも、自分で「大丈夫」と判断せず、4つのことを周りの大人に伝えることを教え、「伝える力(コミュニケーション力)」を培っておくことが大切です。

子どもから危機に遭遇した訴えがあった時、先生や保護者などが取るべき行動は、**①いかにささいな訴えでも聞き流さない、②何があったか、どうするかを、必ず上司や同僚などに伝える(相談する、情報の共有)、③何らかの対応が必要と感じたら、早急に関係機関と連携(連絡先をきめておく)など**になります。(➡P16)。

前兆6・3・2の原則

犯罪者は「ねらいやすい」子どもの情報を求め「うろつき」徘徊します。この「うろつき」は子どもが被害に遭う事件の前兆です。早くその前兆をキャッチすることができるかどうかが、事件や声かけ事案の発生を未然に防ぐ鍵となります。

例えば半年に6回「変だ」、1ヶ月に3回「変だ・怪しい」ことが起こり、最後に1週間に2回「大変だ、問題じゃない?」ということを見聞きしたら、その子どもの住む町や通う園の周りで「危ないことが起こる前兆」と警戒し、皆でしっかり子どもを見守ってください。

子どもを巡り悲しい事件が起こった後、「そういえばあの時」、「変だと思ったんだ」などという言葉を必ずといってよいほど耳にします。これは予兆/前兆を捉えることに失敗した「深い反省の言葉」です。

5 子どもの安全能力を測りましょう

これまでおこなった安全教育がどれだけ身についたか、特に卒園前の年長児の学習達成度を確認することは大変重要です(➡P14)。

これにより小学校で行われる安全教育に向けて、接続期としての園での安全教育が十分になされたかが確認でき、どの部分が不足しているかが分かり、先生自身の指導を振り返り、さらに良いものにしていくことが可能となります。

このチェックリストは、接続期としての幼児期に身につけておくとよい主要な力をチェックできるようになっています。子どもがどのくらい安全基礎体力をつけたか、また子ども自身が犯罪に対しどれくらい危ないかを3段階で測れるようになっています。このうち、特に第3段階の子ども(チェックした個数が0〜3個しかない子ども)は、どの項目がチェックされたかに関わらず、簡単で良いので再度最初から全て丁寧に教えるようにしましょう。

またチェックリストを使った診断は、年長児になった初期時(4月頃)と就学直前時の2回行い、進歩の程度をチェックし、それに合わせて指導を行うことをおすすめします。

6 接続期におけるマイ園プログラムを充実させていきましょう

幼児期は、危険について遊びや環境を通して学ぶことが中心になります。まず年少・年中児は特別なことをしなくても、普段の遊びや語りかけの中に、P6の表1や下記の基本プログラムの内容を意図的・系統的にちりばめてみましょう。そうして「安全基礎体力」を培うことで、就学直前には、しっかり前を見て歩きながらあいさつをし、いざという時にははっきり「いやです」と断り、走って逃げて伝えられるようになります。特に、しっかり前を見て歩くことを身につけておくと、交通事故から命を守るための力にもなります。

表1の9つの力の根っこを育てるためにはどの遊びが合うかなど、考えながら本マニュアルを読んでいただければと思います。

本マニュアルは、子どもの成長発達段階に沿い、小学校でなされる安全教育とのつながりを踏まえた危機回避・克服を目的とする最初の段階の学習に取り組むために、また小学校入学以降一人で学校に通い、学童クラブや塾・お稽古事などに通うなどの行動圏の拡張に備えた安全教育を行うための一助になればと作成いたしました。様々な危機遭遇場面を想定し、嫌なこと・恥ずかしいことをされそうになった時や、周りから見えない場所に誘われた時に断る力をつけるために、普段の遊びに「マイ園プログラム」を盛り込みながら、実行してみましょう。その際は安全基礎体力の習熟度を測りながら進めてみましょう。

【ご参考】接続期における犯罪からの体験型安全教育基本プログラム

		園の基本的構え	園における犯罪からの安全学習の一般的目標	園における犯罪からの安全学習の具体的内容
幼稚園・保育園・認定こども園	年少児・年中児	●園は犯罪からの危機回避・克服を目的とした安全教育の最初の段階の営みを行う ●園は園内外で発生する可能性のある危機遭遇時を想定した行動計画を立てる ●園は子どもの安全確保と安全教育をより効果あるものとするため、子どもの保護者などに安全教育の知識を伝える	●本人に関する基礎的情報(個人情報)を知る	●自分や保護者・園の名前などが言える ●保護者以外にもらしてはならない基本的な個人情報のあることがわかる
			●社会的コミュニケーションに関する基礎的力を知る、身につける	●自分や友達の「命」や「身体」の大切さ・かけがえのなさを知る・感じる ●好きなことは好き、自分の物は自分の物と言葉や態度で表そうとする ●園の先生や近所の人にあいさつをしっかりするようになる
			●危機回避・克服に関する基本行動(その時どうする)を知る ●犯罪からの安全に関わる基本的心構えや知識・行動を身につける	●園の先生や保護者の指示の意味を理解しながら行動しようとする ●一人で歩きまわらない・出歩かない・一人にならないなどの大切さがわかる ●「鬼ごっこ」などで自分の体力を知る
	年長児		**●本人に関する基礎的情報(個人情報)を知る**	●とっさの時に自分や保護者・園の名前が言える。住所、保護者の勤務先を覚えようとする ●個人情報を伝えてよい人・いけない人の区別をしようとする
			●社会的コミュニケーション力を身につける	●知っている人でも嫌なことは「いやです」、「だめです」、「いきません」と言葉や態度でしっかり伝えようとする、伝えることができる ●その日の出来事や出遭った変なことなどを保護者や先生に一つでも、毎日でなくてもお話しする
			●犯罪者及び犯罪者行動に関する基礎知識を知る機会を持つ ●何が変なこと、怪しいこと、危ないことかの基本を自分で判断しようとする ●危機回避・克服に関する基本行動(その時どうする)を知る機会をもつ。(小学校一年生になる直前に)基本行動が一つでもできるようになる	●前方を注意しながらしっかり前を見て歩こうとする ●恐い人(犯罪者)の基本行動(何メートルから注視するかなど)の中でも特に重要な行動があることを知る機会をもつ ●走って逃げる、大声を出す、ブザーを鳴らす、ジタバタする、腕ブンブンする、すり抜け遊びなど「その時どうする」かの基本行動を学ぶ、もしくは基本行動ができるようになろうとする ●どんな子が狙われやすいかを知る、考える機会をもつ ●犯罪が起こりやすい場所(「ひまわり」)に関心をもつ ●どんな人が危ない人か(「はちみつじまん」)を知る機会をもつ ●暗くなったら、連続した街灯のある道を通るようにする
			●犯罪からの安全基礎体力の体得程度の測定	●犯罪からの危機回避・克服の「力」のつき具合を測る (➡P14)

*ここでは教諭・保育士を「先生」と表現する　**●の項目は、園児指導で特に重要な項目

『園における犯罪からの安全教育プログラム』
㈱ステップ総合研究所2018

令和8年10月印刷
発行　世田谷区
編集　子ども・若者部子ども・若者支援課
〒154-8504 世田谷区世田谷4-21-27
TEL 03-5432-2253　　FAX 03-5432-3016
監修　株式会社ステップ総合研究所所長　清永奈穂

＊この冊子の記載内容はすべて無断転載を禁じます。

広報印刷物登録番号　No.2482

PRINTED WITH SOY INK

〈参考テキスト〉
1.『犯罪からの安全学習ノート～ハサミとカミはお友だち・安全動作の基本プログラム～』、(株)ステップ総合研究所
2.『犯罪から園を守る・子どもを守る　今すぐできる園の防犯ガイドブック』、清永菜穂、(株)メイト、2018
3.『いやです、だめです、いきません　親が教える子どもを守る安全教育』清永菜穂、(株)岩崎書店、2021